

大川内山の生活動線は路地であり、その道は観光の点から石畳にされている。そのため、路地と大川内山の関係を強く感じ、大川内山全体に張り巡らされた路地は観光を通して住民の生活にも目を向けさせ、大川内山での産業と生活の職住近接を感じることが出来る。この路地という道への応答を考える設計から、一本の道を挿入し、最終的に路地に接続した。

これは本設計の3つの建築を繋げることと本設計と大川内山を繋げるほかに、窯元の作業効率の向上、観光客の動線を整理するための設計であり、配置である。

路地への道の挿入

04. 路地

01. 資料館

配置平面図 S=1:800

## 01. 大川内山の変容

本設計における対象敷地である大川内山は、佐賀県伊万里市大川内町に位置し、鍋島焼(以下、伊万里焼) の生産を行う場所として開拓、御用窯が置かれた。この場所は藩主や大名などへの献上品となる焼物の生産 を目的として開拓され、鍋島藩の徹底した管理の元、有田などから多くの陶工たちが集められた。大川内山 が生産地として選定された理由として三方が山に囲まれていることで人の出入りを管理しやすいこと、また、 伊万里焼の表現技法で鍋島様式の一つである「鍋島青磁」の原料となる青磁鉱石が採れたことが主な理由で ある。現在は30近くの窯元が大川内山に軒を連ねており、伊万里焼生産地として観光化している。

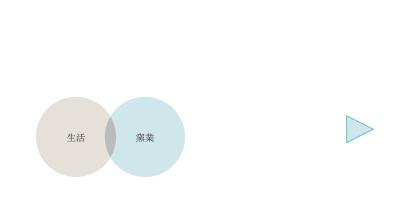
佐賀県は焼物で有名であるがその中でも伊万里焼、有田焼の知名度は高い。この2つは関係が深く、有田 焼の技術を藩の元で独自に改修したものが伊万里焼であるため、作業工程はほとんど変わらず、絵付けの技 法が異なることが大きな違いである。伊万里焼と有田焼は作業工程は変わらないものの産業全体で見ると大 川内山はあまりにも未熟であった。有田焼は町全体として販売、物流と第3次産業まで細分化されていたの に対し、大川内山は生産を行っていたものの卸す先は藩が管理していたため生産の機能しかなく、廃藩置県 により、卸先でもあった藩が廃止されたことで生産から販売まで販売の知恵も伝手もない陶工たちが一手に 行わなければならなくなった。

現在では陶工たちは窯元となり、組織力と販売までの流れが出来ているが、新たに観光地として発展した ことで大川内山は窯元の作業場、店舗、住居、観光が入り組んだ形となっている。大川内山は町の要素を変 えながら伊万里焼生産地として常に変化し続けており、これは大川内山の特異性と言える。

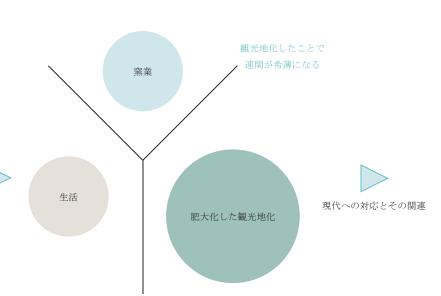


### 02. 伊万里焼生産の再構築

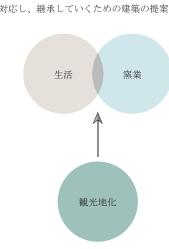
これまで30近くの窯元がある中で切磋琢磨し、大川内山を伊万里焼生産地として繋いできた。しかし、それでは作業効率的にも将来的にも多くの問題点を生むことに繋がっている。 それらを本設計の提案により解消することで地域産業でありながら様々に対応してきた大川内山で現代により対応し、継承していくための建築の提案を行う。



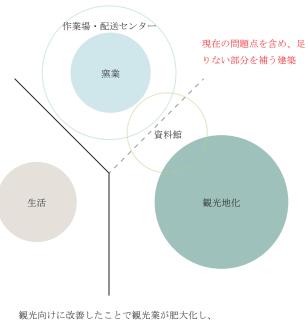
藩窯当時は大川内山において窯業と生活は密 接に繋がっていた。当時はこの2つの機能しか なく、窯業に特化した地区であった。



観光向けに改善したことで観光業が肥大化 し、伊万里焼生産地としての機能が希薄になる。 それにより、観光としても焼物を買うだけの単 調なものとなっている。



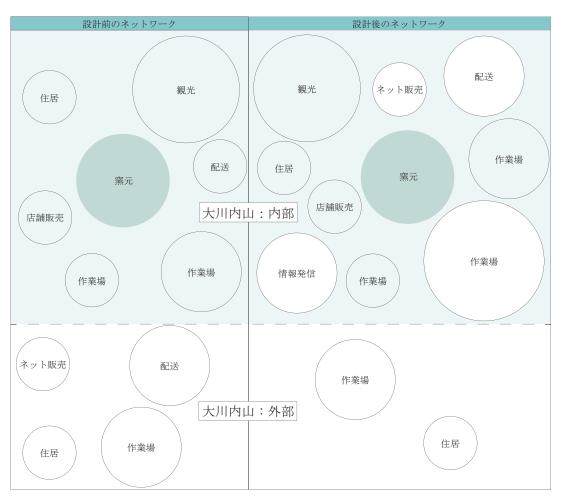
観光地化に伴い、大川内山は観光向けに道や建 物は整備され始める。それにより窯元も観光客向 けに販売に力を入れ始める。



伊万里焼生産地としての機能が希薄になる。それ により、観光としても焼物を買うだけの単調なも のとなっている。伊万里焼生産機能の提案として資料館・ 作業場・配送センターの3つの建築的機能を提案する。

#### 03. 大川内山のネットワーク

設計前後における大川内山の窯業的機能の分布を示す。これらの関係が大川内山では常に変化してきた。それらの関係を本設 計によりさらに加え、整え、変化させる。



代物流社会に対応した大川内山窪 -伊万里焼生産の再構築-校名 崇城大学 氏 山田 峻平 名

#### 提案する大川内山

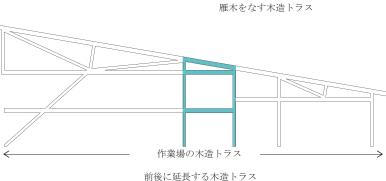
本設計の3つの建築は対象者として窯元と観光客 としている。本設計を通して大川内山の歴史的価値 の向上と窯元の利便性の向上、観光客の動線の整理 とより深く大川内山、伊万里焼を理解することを目 的とする。

大川内山の特異性として挙げられる時代とともに 常に変化し続け、独自で繋いできたことは本設計に も言え、現在は生産から配送、通信販売、情報発信 の機能が求められており、それらの機能を配置する ことで二次産業からより幅を広げた三次産業までを 大川内山で完結するような設計を行った。こうする ことで大川内山の特異性を尊重しながらこれまでに 挙げたような大川内山の価値・利便性などを向上さ せる設計となり、資料館・作業場・配送センターの3 つの建築として表現し、提案を行う。

## 04.3 つの建築の繋がり

基準となる構造体





# 道の可視化と建築の繋がり

道の挿入において、その道の可視化と3つの建築 の繋がりを表現するために木造トラスを構造部材と し、そのフレームの形状の統一によりそれらを表現 した。

同じ形状としてうえで、資料館では対のフレーム とし、2つの軸を形成し、作業場では見学通路と焼物 収納運搬用レール上に配置し、前後に構造体が延長 されることで作業場を成している。配送センターに おいては、雁木部分に配置し、3つそれぞれが観光客 が通過する場所に配置することで観光客に対して、 道の可視化と3つの建築の繋がりを表現する。



藩窯時代の動線による境界線

中央の路地から本設計が見えることはない。

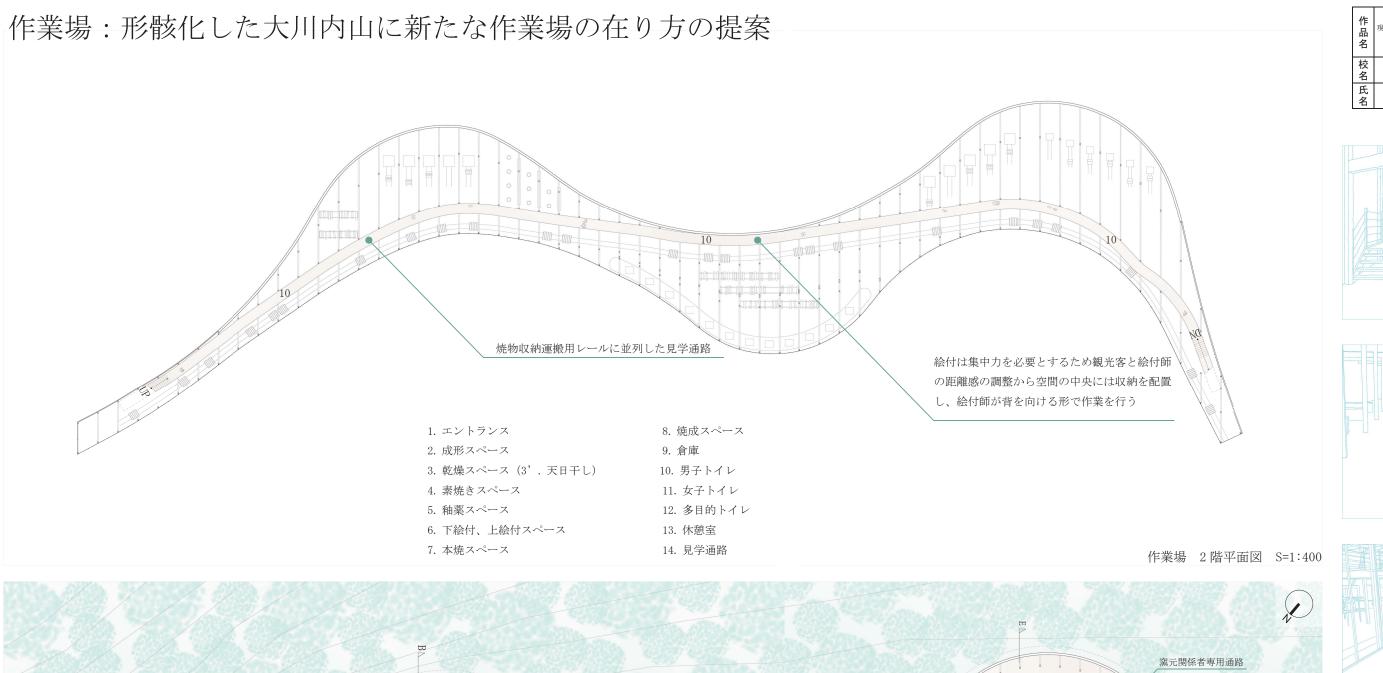
05. 本設計と既存建築の境界

7. 御用窯跡

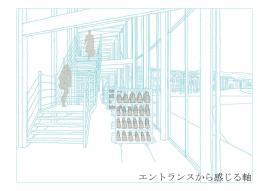
本設計は3つの建築からなる大規模建築と言える。そのため、街の景観を観光源とし ている大川内山において、その景観を変える要因となる恐れがあった。

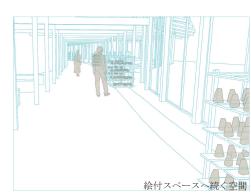
□ 本設計ではそれを敷地のレベル差によって本設計と景観が干渉しないよう計画した。 3つの建築の繋がりとなる道は藩窯時代に陶工や役人が使用していた動線を使用する。 写真1~3は8から見た現在の道の写真である。写真4は4・5の現在の写真である。 そこは整地された敷地を残しながらも街とはレベル差があることで距離が生まれてい る。そこに本設計を配置することで景観に干渉することなく、本設計と街を結びつける。

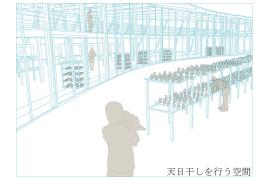


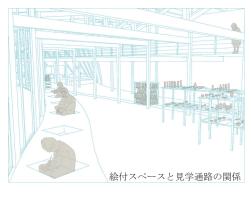




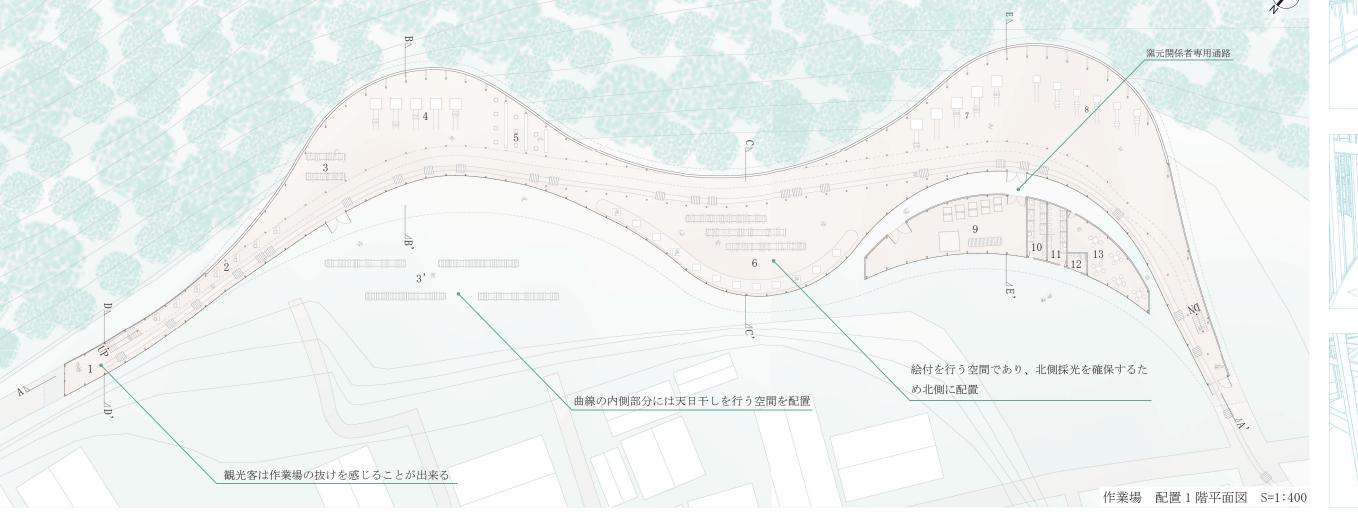


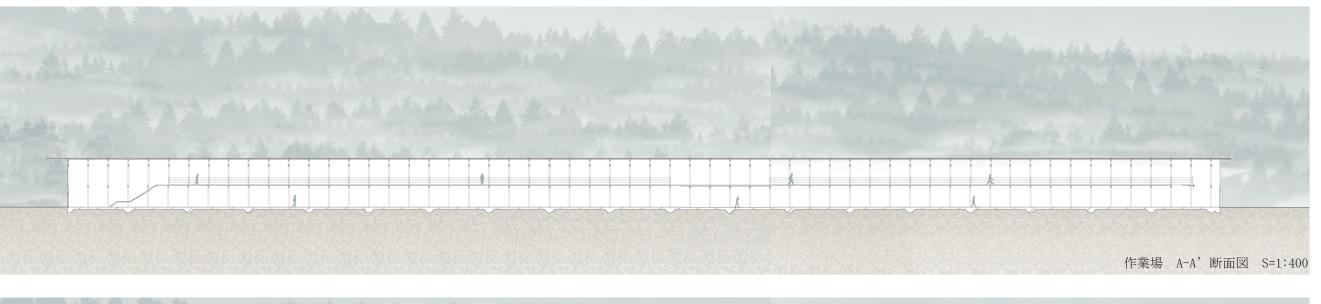




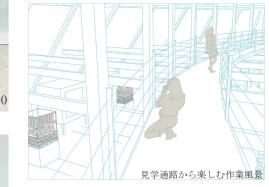






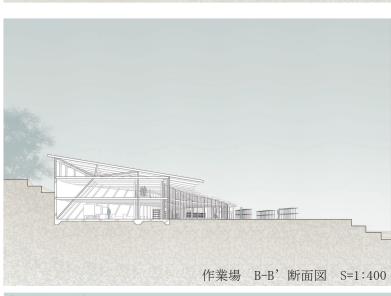


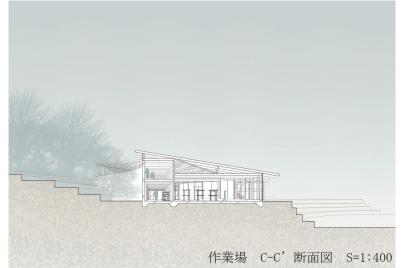








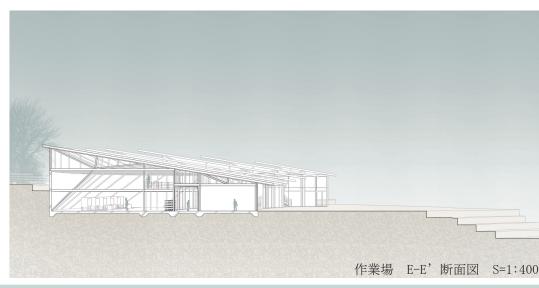




伊万里焼製作工程の流れ

焼物収納運搬用レール





# ダイアグラム:作業場



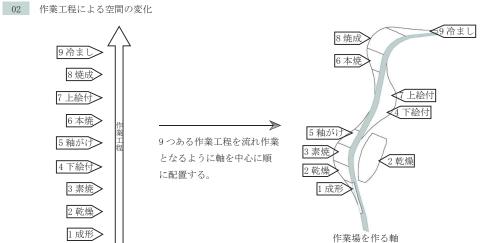
現在、大川内山に作業場を置いている窯元は少なく、観光客は作業風景を見ることはできない。伊万里焼生産の地として栄え、今では観光地として発展している大川内山だが、伊万里焼生産の点では<mark>形骸化</mark>したといえる。

また、現在の窯元はそれぞれが窯を持ち、組織として運営しているが、 少子高齢化、人口減少の影響を受ける大川内山では数十年単位で考えたと きにその存続が危うい。 1つ目の軸である伊万里焼製作工程の流れは、製作工程が伊万里焼作りおいて不変 のものであり、これから数十年、数百年変わることのないものである。この工程を流 れ作業となるように作業場の空間に配置する。

3つの軸からなる作業場

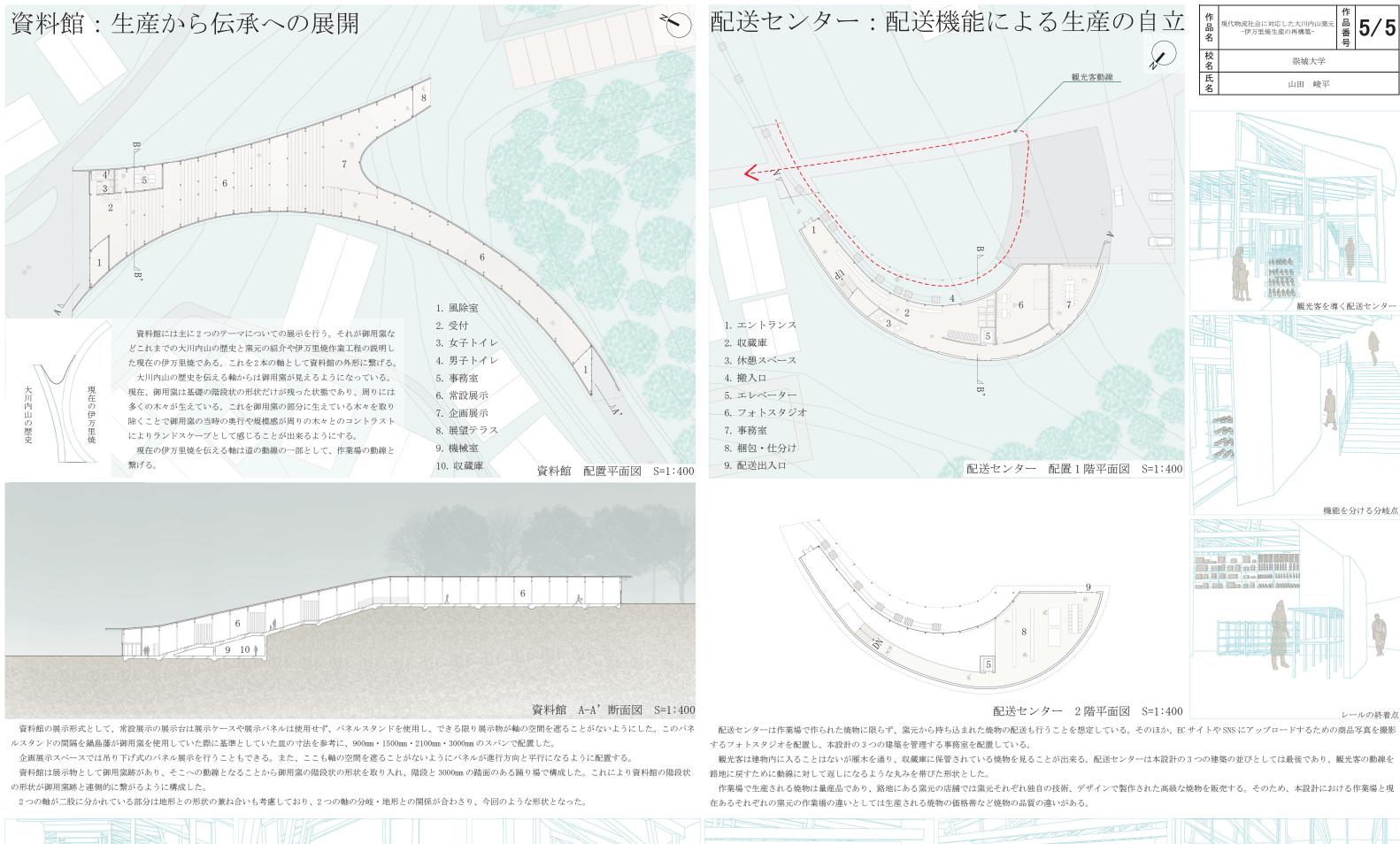
2つ目の軸である焼物収納運搬用レールは流れ作業において、レールに乗る焼物は 工程ごとに変化し、流れ作業の工程を可視化する機能も持っている。

3つ目の軸である見学通路は、本設計の3つの建築を繋げる一本の道の一部であり、作業場の2階を通る。見学通路は焼物収納運搬用レールに並ぶように続いており、レールにより可視化された作業工程を見学通路を進むごとに見ることが出来る。



軸を中心に流れ作業であること、作業効率と作業の繋がりを分かりやすくするために建物の形状としては曲線的に構成された形とした。これにより作業場に流動性が生まれ、また、ほかの2つの設計も曲線的であり、その流動性は3つそれぞれに繋がりを与え、一本の道であることを表現する効果も生み出している。

作業場は軸を中心に3か所の膨らみを持っている。 そのそれぞれに作業工程が入り、上絵付と下絵付は北 側採光を取り入れるために軸から北側に膨らみを与え た形となっている。作業工程の中に天日干しの工程が あり、それを曲線のへこみの部分に配置した。



雁木から見る焼物倉庫